



2. 挨拶

永宮 正治 氏（日本学術会議会員・同物理学委員長、J-PARCセンター長）

ご紹介いただきましてありがとうございます。本日は日本物理学会キャリア支援センターの主催で「物理学に夢とロマンを」というシンポジウムが開催されることになりました。主催者の一つに、日本学術会議・物理学委員会も名を連ねさせていただいておりますので、物理学委員会を代表いたしまして、一言ご挨拶を述べさせていただきます。

少し見当外れかもしれませんが、まず私個人の話させていただきます。私が物理学に目覚めたのは中学生の後半でありました。当時、ガモフという先生の書かれた「不思議の国のトムキンス」という本を読みました。宇宙のサイズが身近なスケールに変わったときには、光は直進せずに宇宙をグルッと回ってくるので、床屋さんの鏡では自分の頭の後ろが見えたりもすると書かれておりました。また、時間スケールが極端に変わって自転車の速度が光の速度に近くなるときには、自転車が縮んで見えるとか、あるいは、原子間距離くらいが身近なスケールに変わったときには、原子の中を旅行できて新しいものが次々と見え出すとか、実に驚くことが沢山書かれておりました。物理学を勉強すると、極微の小さな世界から宇宙のように大きな世界まで、すべてが分かるのではないかと、物理学に対して夢とロマンを掻きたたせる本でありました。20世紀の物理学は、このように、小さな小さな世界から大きな大きな世界まで学ぶことが出来る、まさに素晴らしい道具として存在していたのではないかと思います。そして、若者もその物理学の魅力に惹き付けられていったのだと思います。

しかしながら、現実の生活において、最近の物理学研究者は別の側面も担っております。まず、物理学の道具である量子力学や相対論といった学問体系をマスターするには、長期間の勉学が必要とされます。努力してこれをマスターして20代の後半に一人前の研究者となっても、当初は3年契約とかいった職に就くために、安定した職業を得るには3年とか、時にはもっと長く時間がかかります。アメリカ人は非常に現実的ですので、よく「物理学は割に合わない」と言います。努力する時間ばかり多くて、その後得る報酬が少なすぎるからです。最近、医学に関しても「法律に比べたら医学は割に合わない」とアメリカの学生は良く口にします。このような物理学の負の面が日本でも認識され始め、物理学

は教育の現場からも徐々に疎ましがられ始めている風潮が見受けられます。そして、今日では、理数系教育の危機も生まれており、これが叫ばれて久しくなります。

しかし、ここでもう一度考えてみようではありませんか？ 物理学の夢とロマンは、20世紀においては物理学の中だけに閉じていました。しかし、近年は物理学それ自身が変貌しつつあります。また、物理学を取り巻く世界の中でも、ますます夢とロマンが拡がりつつあると思います。さらに、物理学から多くの技術が生まれました。その技術の拡大や発展を図るには、その基礎となる物理学に戻って考えるべきではないかという点が叫ばれています。私自身も原子力関係に携わっておりましたが、そのときもそうした言葉が種々の場で強調されました。また、物理学自体も生命科学や複雑系の科学、さらには、今日お話しします経済学等の領域に進展し、その学問の拡がりも急速に拡大しつつあります。具体的な例に関しましては、本日も講演されます諸先生方が、多くの実例をお示しいただけるのではないかと期待しております。

物理学の夢とロマンに立ち返り、それをキャリアパスの多様化と結びつけていこうではないか。これが今回の一連のシンポジウムのゴールではないかと思えます。このゴールは大きな目標でもあり、また、このゴールを達成するために、定まったガイドラインがある訳でもありません。そして、道のりは長いと思えます。しかし、この問題提起は重要な課題であり、日本学術会議におきましても、人材問題に端を発して、この課題に正面から取り組み始めております。皆さんと協力をしながら、私共も、今日の一日の成果を大きな糧とし、このゴールに向かって努力したいと思っております。

とりとめのないことばかりを申しましたが、はじめのご挨拶に代えさせていただきます。

☆